

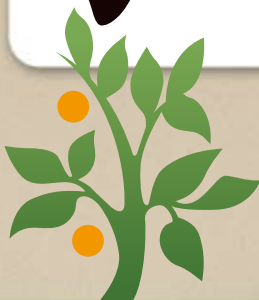
支えあう喜びを新しい世代へ

Issue Number

33

Calebasse

からばす



CARA

ASSOCIATION POUR LA COOPERATION ET L'AUTOGESTION RURALE EN AFRIQUE DE L'OUEST



企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

村 民と共に生活している日本NGO

JICA国内事業部市民参加推進課長
田和美代子

2011 年秋、カラ=西アフリカ農村自立協力会提案の JICA 草の根技術協力事業を開始するにあたり現場を視察する機会がありました。予想通り現地は、電気も水もなく携帯電話も通じない地域で、着くまでにこんなにも道が悪く、本当に人が住んでいるのだろうか、と疑問にさえ思うような地域でした。しかし、到着した村の人は陽気で、集会には村中の老若男女が目を輝かせて参加していたこと、村には、ごみひとつ落ちていなかったこと等が印象的でした。後から聞いたところ、村人たちが協力してトイレの清掃やゴミ捨て場の清掃などを月に二回行っているとのこと、前回 3 年間の保健のプロジェクト(これも JICA 支援)で学んだことが確実に生活に溶け込み、村の人たちの手で実践していることが分かりました。



村の保健指導員と懇談中の田和氏

プロジェクト マネージャーの村上さんからは、プロジェクト開始に当たっては、村人の生活や意識調査を戸別に行い、人々の生活や考えを正確に把握すること、そして村側の責任範囲と JICA の資金による事業でカラを経て行なう事を説明し、支援側の責任範囲をも明確に説明して進めてきた事を聞きました。通常、東京サイドでの仕事が多く現地のあるべき姿を考えていても、実際には、事業の活きている姿を見ることは多くはありません。このようなカラの片田舎での事業を視察して、10 年、20 年という長い時間をかけて人々の能力を信じ、信頼関係を構築して支援事業を行うことの大切さと、プロジェクトは生き物であることを再認識しました。こんなエピソードも伺いました。P2 へ→

<http://ongcara.org/>

2015/4/1 発行

NO.33

からばす

【エピソード】 識字教育を始めた当初、カラは識字教師の育成研修会参加者に手当こそ出さなかったが、ノートやボールペン、食事(3食)、特に遠くから来る人たちには、泊まり込みである為、研修期間中、石鹸などのすべての品まで用意していた。このようにする事が地域の習慣だったからである。しかし、余分な費用は無くこのような経費は助成金を申請できないと思い、その費用は村上さん個人のポケットマネーから支出するより他なく、そのための準備も大変であった。ある時、これを完全廃止することに決めた。しかし、当初、カラのスタッフたちは、何も出さなければ誰も来ない、せめてノートとボールペンだけでも出してほしい、と猛反対したらしい。しかし村上さんは、「とにかく、カラは何も出さない。みんなの子供が小学校で勉強する為に、親は毎月お金を出している。カラは村の人に何も請求しないで教えているではないか」と主張し、妥協しなかった。

村へ研修会の通知をしたところ、大勢ではなかったがちゃんと出席者があった。その後もこの方針を貫いてきているが、今では村から識字研修の要請が来るまでになっている。参加者の中には、昼にトウジンヒエを持参するから午後も授業を続けたいと希望している人もいる。

このような話を聞いていると、当初のカラさんからの提案事業に対し、現場を知らない私は、頓珍漢な質問やコメントを沢山してしまったと思いますが、時には分かりやすく、時にはびしょりと厳しい切返しがあり、とても緊張感のある打ち合わせでした。

1993年以来、部族のそれぞれに異なるマリ人スタッフと共に20年以上に亘り、村人の生活向上のための支援を行ってきたカラの姿勢と、明確で単純そうではあるが、貫く事が困難である理念を手取るように理解することができました。ODAの場合とは異なる立場のNGOでも個性的かもしれない事業の成果を目にし、JICAを背負って視察した身ではありますが、NGOのスタッフであるかのような錯覚にかられていました。

近頃のマリ

村上一枝

2015年2月、約3年間渡航を禁止されていたマリ共和国の活動現地に行ってきました。バマコ市を含む周辺の町は人の波と新品の自家用車、バイク、路上で販売される商品、そして住宅やビルの建設ラッシュで非常に活気が溢れていました。

2月6日のセヌー空港到着時、機内アナウンスがバマコの気温が35℃と放送され、この時期としては経験したことのない気温です。早速日本を出る時から着ていたものを一枚ずつ脱いで真夏の姿になりました。

実は2015年12月末に約1週間程、新規事業(小・中学校建設)について、外務省日本NGO連携無償資金協力贈与契約(通称:N連事業)のために在マリ日本大使館を訪ねましたが、滞在1週間だったので非常にあわただしく過ごしました。

バイクの大群に圧倒

街へ出て目についたのは、何とんでも「ジャカルタ」という名のバイクの群れでした。今バマコでは市民権を得て大きな顔で街中を走っています。元もとはインドネシア製のバイクですが、今では大半は中国製で占められているそうです。通勤、通学時にはイナゴの大群が迫って来るようで恐怖感があります。バマコの家庭では子供が高等学校への入試試験に合格したら「ジャカルタ」を買うと約束する親が多く、十代の青年たちが引き起こす事故が多発しています。日本円で6万円ぐらいで、分割での支払の為に購入しやすいということですが、6ヶ月から1年しか持たず、直ぐに買い替えるのだそうです。このバイクと同様に目を引くのが3輪を土台にした、1.5トンまで積載可能な物資運送車と、5輪の「モト タクシー」、いわゆるバイクを応用した乗り合い自動車です。これらもすべて中国製で10人まで乗車可能です。これらは人待ち顔で路上に並んでいます。マリにたくさんの中国製品が出回り、多くの人が購入するようになったのは、経済的に豊かになった証拠でしょう。トラック、バイク、モトタクシーと輸送車、そして道の両側に積み上げた商品の山、そしてそれを買う人の波で溢れています。自転車に乗っている人は1ヶ月滞在中にはたった2人見かけたただけでした。



バマコの町の賑い



ジャカルタの群れ

「エボラ出血熱」騒動

2014年12月の渡航は、エボラ出血熱の発症騒動の真ただ中で、マリ国際空港・セヌー空港での入国は、前のボタンも留めずに白衣をダラリとだらしく着たマリ医療従事者がフランス人監督のもと、入国者の体温測定を2度もチェックし「その消毒剤で手を拭きなさい!!」と指図していました。

パスポートコントロールでは、役人が「ホット、ホット」というのです。写真が不足なのか、と思っていたら、認証写真を写すからカメラの方を見なさいという意味で、新機材が設置されていました。銀行(カラの取引先銀行のBDM)の入り口でも体温測定をされてから入るのです。そして出国時には、A4用紙の表裏両面にびっしりと滞在中の健康状態についての質問があり、それを埋め尽くしてから空港へ入るのです。でもこの内容をマリ人に理解できるのだろうか(失礼・・・)と、疑問に思いました。

乗り継ぎで早朝パリのシャルルドゴール空港に到着した時も「待ってました!」とばかりに体温測定があり、更に通路をしばらく進むと再度測定がありました。感染しているわけではないと思っても、矢張りおでこ近くに体温計がくると、「もしかしたら・・・」と思うものですね。

バマコ市では、日本大使館へ行く途中の「パスツール病院」が閉鎖されていました。ギニアから帰国したイスラム教僧侶一家が感染していたので入院し、接触した多くの病院スタッフに感染の恐れがあるという理由です。

一方、ユニセフがマリ国民への啓発を行い、全国の市町村の小中学校に石鹸を備えた手洗い用具を支援で備えました。カラの活動地域の村でもこれは見ましたが、不公平なことに学校がセメントで立派に建設された学校だに設置されており、同様の義務教育を行っている土レンガ建設の崩れかけた学校には設置されていませんでした。写真は、カラが建設したカチョラ小学校に設置された手洗い用具で、上部の大きなタンクに4、5、6年生が毎朝水を汲んで来て、全校生徒が石鹸で手を洗います。また同様にエボラ

出血熱感染経路などの書かれた大きな看板が製作されましたが、首都を中心に設置されたものの地方では殆ど見当たりません。予算の都合上看板枚数に限度があったということです。多くの出稼ぎ先から帰郷した人がいる村へ続く街道沿いでは全く見当たらないのです。写真はバマコ市内の啓発用看板です。3月現在、マリには全く感染者はおりません。



街頭に設置されたエボラ感染路の看板



カラが建設したカチョラ小学校に設置したエボラ予防手洗い用具

空港の近代化、飛行場拡張工事

2014年12月、空港に出迎えに来てくれたジャワラとセイドゥに久しぶりに再会し「空港の拡張工事は3年前から進んでないね」というと、「資金を出していたアメリカ政府がクーデターで工事を中止して撤退した、今度はクウェートが出資し工事を続行することになっている」ということでした。工事が再開し、完成した暁には、近代化された国際空港に様変わりするでしょう。

そして「ヘー」と思ったのは、26年間も通ったマリの空港で初めて空港役人に叱られた事です。通常空港にはパスポートコントロールの手前にラインが引いてあり、そこで順番を待つようになっていますが、今までマリにはラインはなく、みんなが我先にとひっついて並び、あわよくば割り込もうとする人も多かったのですが、驚いたことに今回は黄色いラインが引いてあったのです。たまたま私の右足の靴先が5cm線からはみ出ているのを見た役人が「マダム そこから出てはいけません!! ひっこめろ」と指さして厳しく注意を受けました。何て律儀なマリ人もいるのだろうか、これにもいささか驚きでした。

前大統領 アマドゥ トゥマニ トゥーレ氏(通称ATT)の今

2012年3月大統領のイスから失脚したATTは、現在一族と取り巻き連中と共にダカールに逃亡中で、これから裁判にかけられます。1991年に私がマディナ村に住んでいた時、当時の大統領のムーサトラオレ氏政権に対するクーデターが発生し、その時の主導者がATTだったのです。

ムーサトラオレ氏は学生や青年たちの叫ぶ民主化に反対していました。マリは世界の最々貧国でありながらも、彼はアフリカで5本の指に入る金持ちと噂され、スイスやカナダなどの多くの海外銀行に膨大な預金や大量の金の延べ棒を所有していました。しかしそれに反して国民の生活が困窮している、という不満が爆発したのが原因です。クーデターが発生したまさにその時、私はバマコのアパートにいました。夜10時頃、助けに来た仲間の仕掛けた爆撃により投獄されていた学生たちが牢獄を破壊し脱出したのです。その音がすぐ裏で起きたので、私は瞬間的に床から飛び上がりました。事件のあった警察の牢屋は私の住んでいたアパートの直ぐ裏だったのです。

その後ムーサ氏の全財産が新聞で公表され、関連する不正についての裁判がバマコ市で行われた日には、その様子がTVを通じ全国放映されました。マディナ村ではどこからかTVと自家発電機を持ち込み、私も村人の黒山のうちの一人となって興味深く見ていました。ムーサ氏側には30人近くの弁護士が連なり、彼らはフランス人、セネガル人、コードジボアール人の弁護士たちで、中には著名なジャック ベルジェス氏も含まれていました。TVを見ている側の村人は自分が裁判に参加しているがごとくに、相槌を打ったりヤジを飛ばしたりと熱くなりやすい直情型の人が多く、最後まで喧々諤々と大変な騒ぎだったのを思い出されます。裁判後、ムーサ氏はマルカラの牢獄で10年間過ごしました。しかし、彼を慕う多くの人はその間お土産をたくさん持って獄中見舞いに訪れたそうです。現在彼は政府の相談役になって多くの人から慕われ、再び大金持ちだそうです。「悪を制して、手本となす」というのでしょうか? トップの座に着くと人は変わるのでしょうかね。

今回のクーデターの発生時ATTは大統領官邸にいて、反大統領派の襲撃を受け小高い丘の上(写真の頂上からです)の官邸から、日光のイロハ坂のような道を崖下の町までのかなりの距離を徒歩で下り、待たせておいた自動車に乗り込みアメリカ大使館へ逃げ込みました。そしてフランス大使館の自動車は直ぐに迎えに来て、そのままセヌー飛行場からダカールへ逃げたのです。ちなみにこのアメリカ大使館は日本大使館の真向かいにあり広くて立派な、素敵な建物です。



山の上の真っ白い大統領官邸から歩いて逃げて来たのです

テロへの警戒

先日街に出た時に驚いたことに(驚くことばかりですが・・・)、繁華街にあるフランス大使館を囲む頑丈な3mくらいの高さの塀の周囲に、入り口を除いた全面にテントがかなりの奥行きを持って張り巡らしてありました。このテントの中身は砂で満たされており、狙撃された時の緩衝用のようで、同じものが塀の内側にも設置されているということです。更に塀の上部には通電している鉄条網がグルグルと二段に重って巻いてあり非常に物々しい光景です。これは「イスラム国」に対する防衛ということで、銃を持った警備兵が出入りを警備しています。フランス大使館は2度襲撃を受けたということです。街の中心から少し離れたフランス文化会館、アメリカ大使館、国連の事務所にもこのような砂の緩衝物が塀の内側に設備されているそうです。

カラの活動村へ向かう途中のクリコロ町には軍の基地があります。時々フランス人、ドイツ人兵士も交じった訓練に出会うことがあります。クリコロ町を北へ出て直ぐ西側の原野が訓練場所となっています。この場所がサハラ砂漠の中のキダールという場所に地形が似ていると言う事で訓練の場となっているのです。彼らはサバンナの枯れた草木に合わせた色合いの迷彩服を着ているので、私は成程、迷彩服も環境に合わせるのか、とのんきに車から見ていました。銃を構えて原野を走りまわっているのは映画さながらの光景で不気味です。人が通る街道のすぐ横での訓練はチョットどうかと思います。



カラ活動地へ向かう街道に咲く花々

そして2015年2月5日再度マリへ

2月5日のマリ行きは、東京事務局の大内侑美さん(大学3年生)とパリで待ち合わせて、一緒にマリに入国しました。彼女のマリ滞在談は別の項でお読み下さい。

今回の入国時の体温測定は1回でした。しかしパスポートコントロールが前回とはまた変わっていました。今度はセネガルの空港同様に指紋認証です。まず右手親指以外の4本の認証、次いで親指を、そして左手と続きました。どうして毎回変わるのかスタッフのラミンに聞いたところ、写真機での認証確認は、空港役人が十分に写真機を使いこなせないらしいのです。「やっとなりも近代機材を揃えて、西洋並みになったけど使いこなせないからな・・・」と言い、たくさんの写真機が空港倉庫内で無駄に眠っているとのこと。アンバランスな近代化でしょうか。この写真機もどこかの国の援助らしいのです。更に空港の拡張工事についても全くそれらしい気配もみえません。クウェートからの資金援助額はまだマリに入っていないようです。公金の入金はどここの国でも本当に時間がかかるのですね・・・。

建築ラッシュに再度驚きです

現在のマリはまだまだ治安が良いとは言えないので、外国人は村でも危険が及ぶことを考慮し、日本大使館からの注意で新事業の視察も原則的に日帰りとしています。2015年2月から1ヶ月の予定で現地訪問となりましたが、この時もすべての村への事業視察は日帰りです。毎朝6時半に出発しました。

活動村への道すがら、あちこちに見られるのは、建設中の南欧風の瀟洒な家で、非常に洗練された広くて純白な家々です。モダンな家の設計は、外国の設計者のデザインをパソコンで購入して建設しているのだそうです。しかし道路も完備されてなく、水道も通っていませんから多分生活用水はお手伝いさんがバケツを頭に載せて運ぶのでしょう。このような素敵な家々は、小高い丘の上に下界を見下すかのように建設されています。雨季にはどうやって登ったり下ったりするのかと、セイドゥと余計な心配をしています。

それから、今人気の商売は養鶏で、これも村へ行く途中に立派な養鶏場が並んでいるのを見かけます。(ちなみに卵一個の値段は65cfa・約13円です)。そして同じ道にATT(前大統領)のジュース工場がありましたが、今は全くなくなりました。

また、村へ向かう道には、種々な木の花が咲き青空に映えてとてもきれいで、バオバブも小さな実を付けています。35℃以上の気温の日が続き、1日に何回も停電に見舞われます。我慢、我慢の毎日でした。



建設中の住宅

バマコ市内でのテロリストによる襲撃事件

カラのバマコ事務局のジャワラから連絡がありました。既にご存知の方もいらっしゃると思いますが、「首都バマコ市内で3月7日現地時間夜中の1時頃、【ラ・テラス】という、レストランとバーで襲撃事件が発生、警察官と欧州出身の2人を含む5人が死亡し、8人が怪我をしてガブリエルトウレ病院に運ばれました。この事件は、覆面をした数人の男性が4輪駆動車で店に乗り付けて自動小銃を乱射し、取り押さえようとした警察官らに向かって手投げ弾2個を投げ、そのうち1つが爆発し、警察官も死亡したとのこと。これは、2012年3月のクーデター以降、イスラム過激派の攻撃に備えてきたバマコ市で起きた初めての事件です。真夜中のバマコ市はパトカーの音で騒然としていたそうです。

そしてイスラム過激派がテロを起こしている現在、「全てのイスラム教徒がテロリストでもあるような報道がなされていて、非常に問題である。」と書き添えてありました。

スタッフと久しぶりの再会・活動地の視察 活動地を一回り

2012年3月以来、約3年ぶりの現地訪問でした。シラコロラまでの舗装道路から、モバ村へ向かう街道はものすごく崩れ、エロージョンがさらに広がり雨期にはとても通行できません。この道はシラコロラとトゥグニ、そしてニヤミナの3コミュニティを通る道路です。道路の改修工事費用は既に土木工事会社へ納められたそうですが、まだ工事が始まっていないのは、例のごとく使いこみが原因だそうです。

2015年度は、おかげさまでN連支援の中学校と小学校の建設各1棟と付属の教官室を筆頭に、財団や支援団体や個人のご寄付により、識字教室1棟、4ヶ村にトレット建設、2ヶ村に浅井戸の設置、そしてたまねぎ保存庫の建設を1棟、2人の助産師育成と、2ヶ村に産院を建設する予定で、多忙な年になりそうです。しかし、これだけのものを地域に支援できるのもまた大きな喜びです。再三申しあげましたが、カラの事業は（ソフトの面は保健事業を残して）ほぼ村に移行できますが、矢張り資金の必要なハード部門は残ります。上記に述べた他に20年前に設置した手押しポンプの修理もあります。修理費は村の負担とするようにしても限度がありますので、支援が必要な場合もあります。

1994年に最初の事業地であったバブグ村を訪問しました。懐かしい顔ぶれが並んでいました。旧宿舎はボロボロの3部屋を残して他の4部屋は跡形もなく消えていました。【村上の並木道】とスタッフが呼んでいたニームの並木道も立派に育っていました。



バブグ村ニームの並木

1994年バブグ村でプロジェクトを始めた当初、まだカラの自動車もなかったため、バナバ街道のコッサバ村で乗り合いバスを降り、テクテクと約4kmの道を歩きました。しかし途中には体を休める日陰がなく、とてもつらい道でした。私たちだけでなく、この道を通してそれぞれの村へ帰るすべての人も同様な苦痛を感じていると思い、カラが並木を造成しようと思い付き植えたニームなのです。それをバブグ村の人たちに協力するように話したら「手間賃を出さなければ協力しない」と拒否され、全員憤慨し我々だけで植えたニームの並木です。すっかりたくししっかりと育っていました。いろいろな当時の思い出がよみがえり、集まってきた古いアシスタントスタッフ達や、村人と共に楽しい時間を過ごしました。このようなことがカラの活動の醍醐味のように思います。この村の造成林に設置した手押しポンプも20年以上も働き続けています。この井戸を褒めてあげたい気持ちです。

次いで、1997年に造成したニヤマコロググー村野菜園を訪問しました。村に最初に造成した野菜園は、雨期の大水で流されてしまい、その後少し離れた場所に引っ越しました。以前流

された場所にも行って来ましたが、この付近は今素晴らしい個人の野菜園が並んでいて、キャベツ、トマト、ナス、タマネギ、ニンニク、トウガラシ等が栽培され、傍らにはたわわに実を付けたオレンジの木が2列に、またパパイヤも栽培されていました。道を隔てた反対側には女性個人の畑も並んでいます。



村の女性のお出掛け

だれか一人が率先して手本になるようなことを

行えば、それに続く人が必ず出てきます。お土産にたくさんのオレンジとパパイヤを貰って来ました。都会の喧騒とかけ離れた、のんびりした村の光景が広がっています。

2006年に建設したバブグ小学校は、非常に成績のいい学校ということでした。1994年には7人の子供たちが隣村のファニ小学校へ通学していましたが、カラがN連支援で小学校を建設し、現在は130人以上の子供たちが通学しています。

当時独身だった村のアシスタントスタッフは4人の子持ちになり、4年生の末っ子が私の側にいたので学校での成績を聞いたら、マリでは学童の成績は全国統一で、平均点を5点と決めています。彼は7点だったと恥ずかしそうに言うので、みんなで「エライ!!もっと勉強しなさい」と励ましたら、更に小さくなった声で「ウイ」とフランス語で返事が返って来て、村の子供もフランス語で話すようになったと、スマイラやセイドゥと納得の笑顔を取り交わしました。ちなみに父親のアシスタントスタッフはフランス語を知りません。

20年以上の付き合いになると、年限では計り知れない深い結びつきが生まれるものと思い、とてもゆたかな気持ちになりました。

最後に嬉しいニュースの一つ、ニジュールで行われた17歳以下のサッカーのアフリカ大会でマリが決勝戦で南アフリカチームと対戦して勝利し、優勝しました。これは50年ぶりの勝ちなのだそうです。

初めてのマリ渡航

津田塾大学4年 大内 侑美

夢がかなう

朝はコーランの音で目覚め、太陽の日差しが強い昼は木の下で涼み、暗くなったら寝る。そんな日々の生活に有難みを感じたアフリカ体験だった。念願だったマリへ辿り着くことが出来たことを今も満足している。そこでの生活は、私がこれまで想像もしなかったことばかりで、新しいものを目にするたびに驚き、納得し、感心したのだった。たくさんの人に支えてもらいながら、私のマリでの3週間は無事に終了した。

私のマリ渡航への夢は高校3年生の時から始まっていた。当時仙台に住んでいた私は東日本大震災を経験し、マリからのお見舞いの手紙が届いたことが進路を変えるきっかけとなった。大学では開発経済学のゼミに所属し、貧しい国がどのようにして豊かな国になるのかを考えてきた。今回、「最貧国」と呼ばれるマリに足を運んで得た沢山の気付きは机上の学問からは得られないことばかりで、とても刺激的だった。

飛行機を降りると、それまで着ていたセーターが必要なくなり、季節は冬から夏へと変わった。初めての地はとても暑かった。空港を出ると、そこはたくさんのアフリカ人で溢れていた。にこにこしてこちらを見ているのはジャワラさん、人が良さそうなおじいさんに見えた。そして、運転手のセイドゥさんが元気にやって来て荷物を運んでくれた。車に乗ると村上さんは、月がきれいだねと言っていた。そこからは建物がなく、一本道がずっと続いていた。事務所に着くと、門の側にいた2人の警備員が荷物を運んでくれた。事務所の宿舎のシャワーを浴びようとしたら、ヤモリが壁を走って出てきた時には、それはもう気絶しそうなほどに驚いたものだった。寝ている時は、耳元にくる蚊がうるさくて何度も目を覚ました。暑くて全身汗だくで、寝た気がしなかった。しかし、それらによってようやく私はアフリカに来たなと実感し、そこが日本とは違うことに気付いた。

想像以上の発展

首都のパマコ市での印象は、意外に発展しているように見えた。マリは世界の最貧国という報道のイメージもあり、今にも餓死しそうな人々の様子ばかりを想像していた。しかし実際は多くの人々が携帯電話を持ち、バイクに乗って移動し、おしゃれな洋服に身を包んで生活をしている。ビルも建っている。なぜ最貧国でこんなに携帯電話も普及しているのか。インターネットは通じるし、市場やスーパーに行けば必要なものは揃えることが出来る。食事も美味しい。生活を便利してくれる電灯や舗装道路、ニジェール川をつなぐ橋等のインフラは全て海外からの援助によるものである。それらによって生活は支えられている。困ったことは、昼夜を問わない停電くらいだ。パマコ市の朝は涼しくて長袖でも平気だが、お昼にかけて気温が一気に上がる。多くは昼間に停電が起き、空調が止まりそれまでの作業が中断される。日中の暑さで体が疲れてしまい、夜になると体がぐったりする。停電続きの日々も経験だと思って、冷蔵庫のチョコレートが溶けないうちに消費していた。

村に滞在して

意外に発展していると感じた首都パマコ市での生活がある一方、村で生活している普通の人達の日常は別物だった。カラの事業地域のモバ村宿舎に住んでいるスタッフのアワさん、ケイタさん夫妻にお世話になり、3泊4日を



ンジャマブグー識字教室の前で

村で過ごした。

村での私の一日は、アワさんの家事手伝い。野菜園、女性センター、村の家庭や小学校と中学校も訪ねた。

村の人口は半分以上が子ども達で占めている。学校では体育や算数、フランス語の授業を見学した。

教科書は先生が持っているだけだが、生徒は発言しようと熱心に挙手していた。中学生は習いたての英語を使って、挨拶してくれた。夕方になると、サッカー大会が開かれた。いつの間にか子どもたちはジャージに着替え、一生懸命走る子供たちと熱くなる応援席が印象的だった。

村の女性達はセンターでの仕事が終わると家に帰って食事の準備に取り掛かる。アワさんの家では、私とアワさん夫妻、子どもが3人、お手伝いさんが1人だが、10人分くらいの食事を作る。なぜなら、村のおじいさんやおばあさんがご飯をもらいに来るからである。なんとなく村人同士で互いに助け合って生きていく共同体のようだった。夜、ようやくご飯の準備が整うころには外は暗くなっており、懐中電灯を持ってご飯を食べた。空を見上げると、沢山の星が輝いていて、日本では見たことのない星空が辺り一面に広がっていて、私はとても感動した。

村の生活はいたってシンプルだ。水を得るために井戸へ行く。体を洗うにはバケツ一杯の水で済ませる。食事を準備する時には野菜園へ行き、必要な分だけ収穫する。ガスはないから、薪の数で火を調整する。羊やヤギ、馬、牛、にわとり、ホロホロ鳥を飼っている家もある。村人と顔を合わせるたびに、とてつもなく長い挨拶をする。朝起きて、ご飯を食べて、仕事をして、体を洗って寝る、そんな生活だった。日本の便利な生活から見れば村の生活は「手間」と感じてしまうことばかりで、何をすることも時間がかかるくらい生活様式が異なった。日本にいたら無意識に当たり前になっている「生きるための行動」は、実は大変な苦勞を伴うことを知った。全く暮らしの異なる村での生活は新鮮で、住む場所や暮らし環境が異なっても、人間の基本的な衣食住の営みはどこでも同じで、その基本さえあればどこでも生きていけることに気付いた。

村への支援

モバ村では、カラが建設した学校、野菜園、井戸、産院、女性センターで行われるマイクロファイナンスを見せてもらった。この村の人たちの生活は、カラが長年かけて現地の人々に寄り添い、人々の生活をより良くしようと続けてきた支援の上で成り立っている。滞在中に村の女性の間ではマイクロファイナンスによる集まりがあり、貸付返済と新たな貸付が行われていた。定時に集まったのはたったの7人だったが、その後結局50人以上が集まった。名簿には名前と貸付金額があり、一人ひとり名前を呼ばれ、お金を返していった。その際には全員でお金を一枚ずつ数えていた。それはとても時間のかかる作業ではあるが、文字が読めない人、算数が出来ない人がいる中で、全員が理解し納得するための一番の方法である。この集会は半日かかった。全員参加型のマイクロファイナンス集会は、信頼している村人同士でお金を貸付し、実績を出すことで喜びを得、皆の前でその成果を報告することがそれぞれの女性の自信につながっているのではないかと思った。

このモバ村は、カラの支援により人々の生活が少しずつ改善されている幸運な村である。その一方で、未だ支援を受けることの出来ない村が数多く存在していることにも気付き、そのような村への継続的な支援の必要性を感じた。

母校の宮城学院で先輩方が文化祭の収益金を通して建てた識字学校は、ンジャマブグー村にあり、舗装されていない凸凹の長い道のりの先にあった。長い間行きたいと思って温めていた夢はついに叶った。私とマリをつなげるスタート地点はここにある。ここから私は何が出来るのだろうか。マリに来てマリを見て、マリを感じ、ますますマリの発展に携わりたいという思いが強くなった。数十年後にこの地で人々の生活を明るくする灯火になりたい。今は自分の土台作りのためにしなければならぬことが沢山ある。そんなことを考えていたが、帰りの道も相変わらず最悪で、激しい揺れにだんだん顔色が青くなるので、村上さんは、これがきっとアフリカの青春の思い出になるね、と言ってくれた。



モバ小学校の日本とはちょっと違う
早朝の体操の時間

国内活動

- 11/ 2 【岩手県 紫波町ふるさと会】にて活動紹介 東武ホテルレバント東京
- 11/ 8 【岡谷市読書サークル協議会 文化講座】にて講演会 長野県岡谷市市立岡谷図書館
- 12/14 宮城学院 チャリティー コンサート 2014【クリスマスにマリと出会う ～感謝をこめて～】
宮城学院中学校高等学校 講堂
- 12/18 カラ チャリティー コンサート【かけはし スペシャル 2014】 銀座・十字屋ホール
- 2015年
- 1/21 【金沢パイロットクラブ例会】にて講演 石川県 金沢市
- 1/22 【江守歯科&江守クリニック 合同公開講座】にて講演 石川県 金沢市直江町
- 1/22 【金沢百万石ロータリークラブ】にて卓話 石川県 ホテル日航金沢
- 1/23 【金沢市西倫理法人会】にて講演 石川県 金沢市
- <2015年4月以降の予定> *変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。
- 5/15 【国際ソロプチミスト町田チャリティー コンサート】にて事業進捗状況の説明 町田市
- 5/16 明星大学にて講演 明星大学
- 5/24 【東京白梅会】にて活動紹介 中野サンプラザ
- 5/27 【国際ソロプチミスト伊那創立20周年記念式典】にて現地活動紹介 松本市
- 6/20 【国際ソロプチミスト埼玉クラブ・ユースフォーラム】にて基調講演 ウエスタ川越
- 7/21 柴波町にて講演 岩手県柴波町
- 10月 【盛岡ふるさと会】にて活動紹介 ホテルグランドパレス

からばす(Calebasse) - 第33号 - 2015年4月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589